

同志社大学

2011 年度 卒業論文

〈モンスターペアレント〉の実態と対応策に関する事例研究  
—教師へのインタビュー調査から—

社会学部社会学科

学籍番号：19081068

氏名：白井 智子

指導教員名：立木 茂雄

(20,224 字)

## 要旨

議論：〈モンスターペアレント〉の実態と対応策に関する事例研究  
—教師へのインタビュー調査から—

学籍番号 19081068

氏名 白井 智子

近年、〈モンスターペアレント〉という、不当で不可解な要求を、次々に担任や校長、学校などにつきつけている、保護者に関する問題が話題となっている。すでに教師の間でも日常的に使われているほどである。保護者の無理難題な要求が違法なものへと発展し、最終的に逮捕者がでるほど、社会問題として深刻化しており、保護者の行為や発言によって精神的に病んでしまったり、長年にわたって教師を続けてきた教師でさえ、仕事を続けることができなくなってしまったり、という事例は数多くあげられている。最悪の場合は教師が自殺する事例もみられる。またその数は増加傾向にある。

現在、問題の対応策として、各自治体や教育委員会が保護者対応のマニュアルを作成し推進するなどの手だてはとっているが、それらは一時的な対応策にすぎないため、より抜本的な解決をしていくことが現在の課題である。

本稿は、〈なぜ、このような問題となったのか〉また、〈最善の解決策はなにか〉、先行研究とインタビュー調査をもとに、検討していく。

キーワード：モンスターペアレント，教師の連携，学校内のチームワーク

## 目次

はじめに .....	1
1 〈モンスターペアレント〉.....	2
1.1 〈モンスターペアレント〉の概要	
1.2 なぜ保護者が〈モンスターペアレント〉化してしまうのか	
(1) 教育現場の変化	
(2) 学校の商品化	
(3) 保護者のおかれている状況	
2 学校対応の現状について.....	7
2.1 現在行われている学校対応	
2.2 教育再生委員会	
2.3 現行の対策の問題点	
3 調査の方法 .....	9
3.1 調査概要	
3.2 質問の内容	
4 インタビュー調査の結果 .....	10
4.1 〈モンスターペアレント〉の事例	
(1) A校 Aさんの場合	
(2) Bさんの場合	
(3) Cさんの場合	
(4) B校 Dさんの場合	
(5) Eさんの場合	
5 考察.....	16
5.1 〈モンスターペアレント〉の現状	
5.2 各校の対応の比較と評価	
5.2.1 共通点	
5.2.2 相違点	
5.3 総括	
5.3.1 若い教師の教育の重要性	
5.3.2 教師の連帯・学校内のチームワークの大切さ	
おわりに.....	18
参考文献	

## はじめに

今回、卒業論文を書くにあたって筆者がこの〈モンスターペアレント〉を題材にした理由は、筆者自身が、高校時代に生徒として〈モンスターペアレント〉の問題に悩まされた経験があるためである。無理難題な要求をしてくる保護者たち、教師、そして教師を守ろうとする筆者の保護者たち、それらの人間関係の間で板挟みとなっていた。さらには、それまで仲間として良好な関係を築けていた、子どもたち同士の関係も、徐々にこじれていったのだ。このような経験から、〈なぜ、このような問題になってしまったのか〉また、〈最善の解決策はなんだったのか〉という疑問をもった。そのため、今回のテーマとして取り上げ、教師へのインタビュー調査をもとに卒業論文作成に至った。

近年、〈モンスターペアレント〉という言葉が出回り、社会問題の一つとして挙げられている。メディアでも取り上げられることも多々あり、テレビドラマの題材にされるほどの社会問題として世間の話題となっている。〈モンスターペアレント〉とは、自分の子どもが通う学校に理不尽な要求をしたり、クレームをつけたりする親を意味する和製英語である。2007年(平成19年)頃より使用され、日本で最初にこの言葉を使用したのは、日本教育技術学会会長である、向山洋一(2007)である。向山は、不当で不可解な要求を、次々に担任や校長、学校などにつきつけている保護者のことを、〈モンスターペアレント〉と命名した。向山は著名な教育者であるため、教育界に大きな影響を与え、さらにこの言葉は瞬く間に全国的に広がった。現在では、〈モンスターペアレント〉という言葉が広く世の中に知られ、教師の間でも日常的に使われている言葉となっている。

実際に、保護者の無理難題な要求が違法なものへと発展し、最終的に保護者が逮捕される、という事件が出てくるほど、この〈モンスターペアレント〉の問題は社会問題として深刻化している。保護者の行為や発言によって精神的に病んでしまったり、長年にわたって教師を続けてきた教師でさえ、仕事を続けることができなくなってしまったり、という事例は数多くあげられている。さらに、最悪の場合は教師が自殺に至ってしまう、という事例までみられるのだ。そして、その数は増加傾向にある。

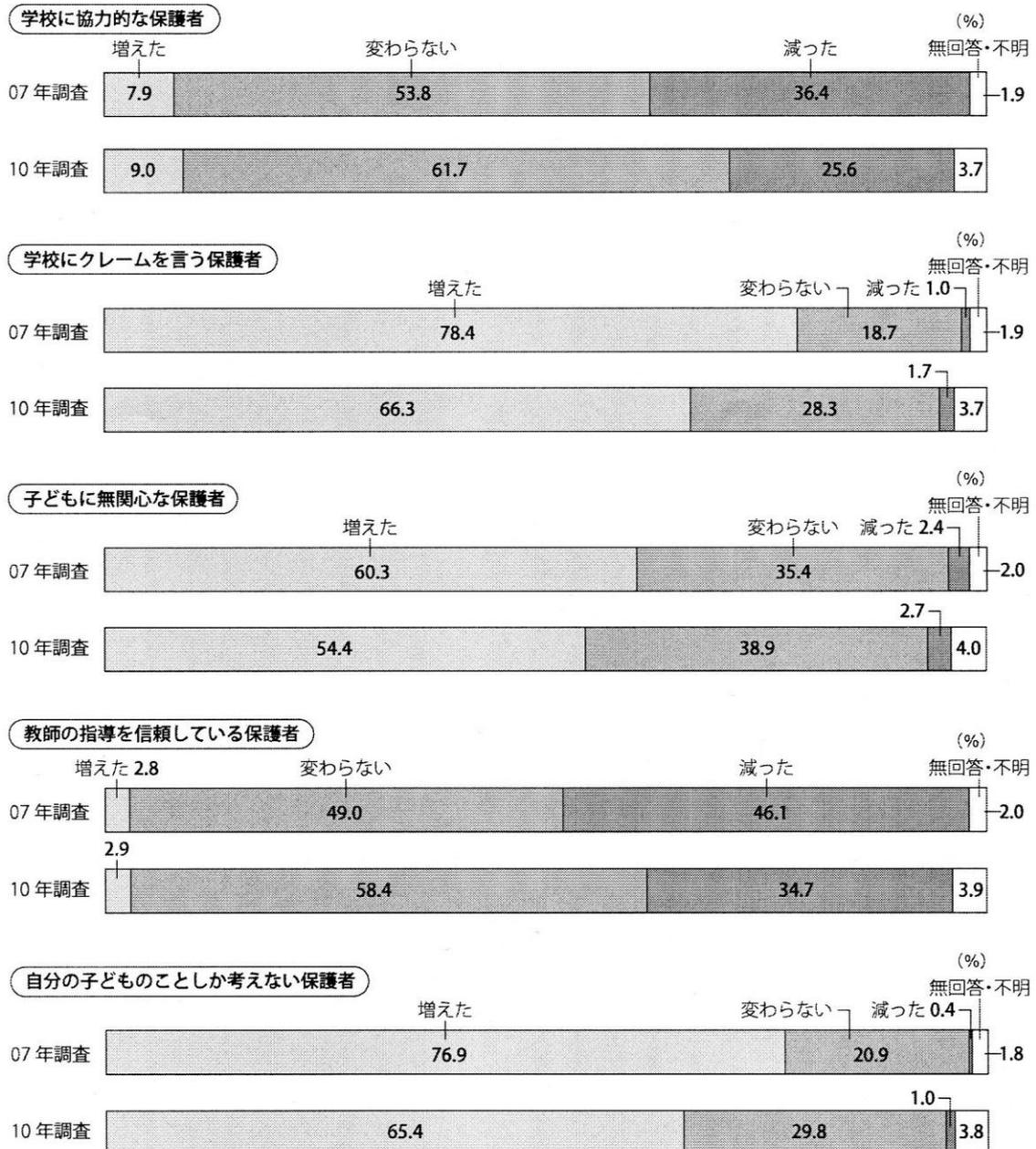
しかし、反対に、この言葉が広まったことによる功罪も生まれてきている。小野田正利は、「モンスターという言葉の魔力は、それらを一気に吹き飛ばすことになる。教師にとって扱いづらい保護者は、すべて〈モンスターペアレント〉と形容することで、教師の間で奇妙な同調感が生まれ始めた」(小野田 2011: 86)と述べている。そのため、保護者の発言が正当な要求であったとしても、教師が身構えてしまい、その時点で聞く耳を傾けてもらえなくなってしまう、というのだ。そのため、現在、自分が〈モンスターペアレント〉と言われてしまうのではないか、という思いから、正当な要求であったとしても発言をためらってしまう、という保護者が多く存在する。

本稿では、まず第1章において、〈モンスターペアレント〉の定義づけをし、そのうえで、なぜ保護者が〈モンスター〉などと呼ばれるまでに至ってしまったのか、その背景を把握する。第2章では、現在、日本が行っている対策について先行研究をもとに言及していく。そして、第3章では、教師経験のある5人の方へのインタビュー調査概要、第4章では、そのインタビュー調査の結果を述べる。そして、第5章で考察とまとめをおこない、結論として締めくくる。

# 第1章 モンスターペアレント

## 1.1 モンスターペアレントの概要

〈モンスターペアレント〉とは、自分の子どもが通う学校に理不尽な要求をしたり、クレームをつけたりする親を意味する和製英語である。2007年(平成19年)頃より使用され、日本で最初にこの言葉を使用した向山(2007)は、不当で不可解な要求を、担任や校長、学校へ次々とつきつけている保護者の存在を、〈モンスターペアレント〉と命名した。



注) サンプル数は、07年調査1,872人、10年調査2,688人。

図1 保護者の変化

出所：ベネッセ 教育開発研究センター(2010)

現在、教育現場における重大な問題は数多くあるが、その中でも現在もっとも重要なものが、この保護者と教師の関係づくりの問題である。学校をめぐる問題は、かつては子どもが中心の内容が挙げられることが多かった。しかし、今日ではいじめや不登校、校内暴力などの深刻さにプラスされ、〈モンスターペアレント〉などの保護者対応の問題が深刻化を増している。

図1は、ベネッセが2010年8月から9月に調査した、第5回学習指導基本調査の保護者の変化に関する図である。「学校に協力的な親が増えた」と回答している教師が9.0ポイントに対して、「学校にクレームを言う保護者が増えた」と回答しているのは、2007より10ポイント以上減少しているものの、9割の教師は、「学校にクレームを言う保護者」が増えた、もしくは変わらない、と回答している。

〈モンスターペアレント〉の問題では、保護者から本来の教師や学校の果たすべき役割をはるかに越えた要求がされることがある。教師や学校側に過剰な要求をし、また小さなミスに対してひどく追及し、なにか問題が起きれば責任をすべて学校側のものとしてなすり付けてしまう。これに対して教師や学校は対応しきれず、困惑し、教師が本来の学校生活をハツラツと過ごせなくなってしまふ。保護者の対応に追われ、教師がハツラツとした学校生活を送ることができなければ、当然子どもたちも楽しくはないし、一人ひとりの生徒に細かく目が行き届きにくくなる。そうしたところに、さらに保護者からのクレームがくる、というような悪循環が続いているのが〈モンスターペアレント〉と呼ばれる保護者の問題である。

小野田(2009)によれば、よくある事例としては、次のようなものが挙げられるという。

- 1)学校行事の写真で「うちの子が真ん中に写っていないのはおかしい」と主張する子どもが石をぶつけてガラスを割ったのに、「そこに石が落ちているのが悪い」と言う
- 2)「私はあの子の親と仲が悪いから、子ども同士を同じクラスにするな。一緒に遊ばせないでほしい」と注文をする
- 3)「うちの子に女の先生は会わないから、担任を代えろ」という要求をする
- 4)未成年は喫煙が禁止されていて、喫煙違反があったので補導と指導をすると、「うちでは許可している。学校がうちの家のことに口出しするな」と主張する
- 5)子ども同士のケンカから発生したカスリ傷程度のけがに対して、一生涯に渡す損害賠償を請求する(小野田 2009: 3)

学校は〈善意の集団〉との自覚が、要求を求める側にも、そして学校側にもあるために、ありとあらゆることを抱え込まざるをえない。しかし、本来的な学校の守備範囲ではないことまで対処を求められ、何ともならない苦情が重なってくれば、何をやっても感謝されず、報われない、という徒労感が積み重なってくる。(小野田 2009)そのために、教師の心が病んでしまい、仕事を続けることができなくなったり、警察沙汰になってしまったり、ひどい事例では教師が自殺を選択してしまうケースもある。

## 1.2 なぜ、保護者が〈モンスターペアレント〉化してしまうのか

### (1) 教育現場の変化

近年、学校や子どもたちの教育を取り巻く環境は大きく変化している。尾木(2009)によると、安倍前内閣による〈教育基本法〉〈教育三法〉の改定や、教育再生会議など一連の教育改革の動きや、必修科目の未履修問題、いじめ、学力低下問題など、教育への不安を煽り、不信感が募るような出来事が相次いだ、と述べている。さらに、小野田も 1990 年代後半から急速に進められてきた新自由主義政策による社会全体の構造改革によって、学校システムを改変する政府の〈教育改革〉が矢継ぎ早に、そして足し算的に教職員に重荷のように降りかかってきたことによって、教師が疲弊しゆとりがなくなっている、と変化する教育現場の不安に関して言及している。(小野田 2009)

教育現場の変化によって、日本の教育システムそのものに対して保護者は不安や不信感を募らせており、尾木は「内閣府の調査でも、現在の日本で悪い方向に向かっている分野として「教育」を挙げる人が 36.1%に上り、設問が設けられた 1998 年以来初めてトップに立った」(尾木 2009: 107) と述べている。

これらのように、政策の変更や、教育に関するメディアのマイナスイメージの情報によって、日本の保護者の不安が煽られ、その不安を解消するために〈モンスターペアレント化〉してしまう保護者が出てきたと考えられる。

### (2) 学校の〈商品化〉

尾木(2009)は、新自由主義の〈選択と集中〉によって、教育の構造改革が有無を言わずに進められたことにより、東京都内では 23 区のうち 19 区で小・中学校における学校選択制が実施され、公立中高一貫校も人気を博しており、そのような教育の自由化が教育の〈商品化〉へつながったと言及している。〈商品〉としての学校を、親たちが〈消費者〉〈顧客〉として選択し、学校側は一人でも多くの〈顧客〉を獲得するために必死になって〈営業〉をおこない、学校説明会やパンフレットによる PR 活動を行っている。なぜなら、東京では新入生徒が入らずに廃校になった学校も多数出てきたからだ。

そういった背景もあり、学校側は、保護者や子どもを〈顧客〉や〈消費者〉として考えるようになってきている。そのため、学校側はたとえ無理難題な要求やクレームがされたとしても、保護者は大切な〈お客様〉のため、その要求をのんでしまったり、違法な行為が行われていたりしても訴えることができない、という現状がある。そして、保護者側は〈消費者〉としての権利が強調され、教育や学校も一般の〈商品〉と同じように、費用や効果あるいは顧客満足サービスを求める傾向を強めている。小野田は、学校が〈商品〉、保護者が〈消費者〉という関係性になっていることが、〈どんな要求でも言わなければ損をする、言えば勝ち〉という風潮につながっており、学校への無理難題要求が急増してきている背景の一つだと述べている。(小野田 2009)

さらに、尾木は日本社会全体のモラルが崩壊し始めたことも指摘している。〈モンスターペアレント〉の問題に始まり、他方面では、飛行機の機内における暴力や駅員に対する暴力事件の多発、病院での治療費未払いや医師・看護婦に対する暴力(モニターペイシエント)、保育料や給食の未払い問題など、多くの社会問題が日本社会のモラルが低下したことによるものだともいえる、と言及している。(尾木 2009)

これらは前述したように、社会全体が構造改革によって、次から次へと足早に制度が変わり、それによって教育の環境が変化していく現状から、人々が政治や社会に対する不安や不信感を募らせていることの表れだといえる。尾木は、人々とのつながりが希薄化になり、かつては家族や地域で対応できていた問題が、今では個々人に大きなストレスとしてのしかかり、それが暴力というかたちで暴発、表面化していると考えられる、と言及している。(尾木 2009)

これらを背景にして、とくに近年では〈サービス業〉へのクレームは厳しさを増している。医師や看護師、駅員やフライトアテンダント、そしてその中には教師も同じようにターゲットとされている。〈公共サービスの機関だから、言うことを聞いて当たり前だ〉という意識や、反撃できない安全な〈サービス員〉としてみられているため、現代の社会の中でストレスを抱えた人たちは、理不尽な要求やクレーム、ときには暴力というかたちにして抵抗のできない〈サービス員〉たちにその矛先を向けているのが現状である。小野田は、「新自由主義政策によって、一方では公共サービス部門への財政投入が切り下げられ、採算が取れるかどうか第一となり(効率性優先)、同時に顧客満足主義への意識が強くなった(強大化する個人)。しかし、人間相手の労働という分野では、提供できるサービスには限界があるにもかかわらず、不当で過剰な要求にも応じざるをえず(感情労働)、困難に陥っている」と、述べている。(小野田 2009) このような日本社会が抱える危機を象徴している社会現象の一つが〈モンスターペアレント〉だといえる。

### (3) 保護者のおかれていた状況

これまででも述べたように、保護者が子どもを育てる環境は深刻な問題を抱えることも多くなってきている。単純に、自然現象として〈モンスターペアレント〉のような社会問題に発展しているということ考えがたい。保護者が〈モンスター化〉する背景には、経済的な問題、格差、教育制度の改革、高度な情報化、そして社会のつながりの希薄化など、多岐にわたっている。小野田は、現在の保護者のおかれていた状況を次のように述べている。

私は〈自子中心主義〉という言葉を使って、今の保護者の傾向を分析しています。自分の子さえよければ、後はどうでもいい、あるいは自分の子どもの言うことを、すべて信じてしまう気持ちが強く出てくることもあるのです。(小野田 2009 : 10)

小野田は、続けてこう述べている。

〈失敗のできない子育て〉という強迫観念があり、同時に地域社会でのつながりが薄くなる中で、保護者自身の横の連携(保護者同士の結びつき)ができにくくなり、孤立感を深めていることも進んでいるようです。(小野田 2009 : 10)

このようなことから、自分の感情のはけ口をもたない保護者が、〈なんでも受け入れてくれる〉学校という公共サービスに対して、無理難題な要求を突きつけてくることがある。地域社会をはじめ、人とのつながりが希薄になったことで、保護者自身が心の中に秘めた

葛藤や、内面に抱えたストレスを発散させる場所がなくなり、それらを発散させるため、ターゲットとして学校教職員など公共の〈サービス員〉に矛先が向いていると考えられる。

このような、〈モンスターペアレント〉と呼ばれる、今日の保護者について理解するために、尾木（2009）は理念型の〈モンスターペアレント〉の心理的背景について、5つに分類して考察している。

まず、〈わが子中心モンスター〉である。このタイプでモンスターとなる原因として考えられるのは、わが子中心主義であり、子どもに対して保護者が過保護であり、過干渉という特徴がある。具体的には、〈自分の子が挙手した回数を毎日報告してほしい〉、〈わが子の主役の劇をつくりやしてほしい〉、〈娘の書道の作品をほめてほしい〉など、過保護で過干渉な要求をしてくる、わがままな保護者だといえる。「このタイプの親は、わが子が中心でなえれば気が済まない。わが子を私物化し、猫かわいがりしているケースが多い。」（尾木 2009: 109）そのため、要求が通らなければ、運動会や学芸会や遠足などの学校行事への参加をボイコットさせたりするケースが多い。要求のレベルは低かったとしても、教師をとて悩ませる理由は、子どもの成長や発達保障を考えると、教育機会確保のために要求を呑まざるをえないためだ。

2番目に、〈ネグレクト・モンスター（育児放棄の親）〉である。具体的には、育児放棄によって保護者会や授業参観も参加せず、呼び出したとしても応答がなく、家庭訪問をおこなってみても居留守をつかわれてしまう、などの傾向がある。「このタイプの保護者は、うつ病などの精神疾患を抱えていたり、親自身が自立できていないケースが多い。福祉の援助を必要としているケースも珍しくない。」（尾木 2009: 109）こうした親は、地域でも孤立している場合が多くあるため、教師としては非常に対応が難しいとされている。

3番目に、〈ノーモラル・モンスター（倫理・道理なき親）〉である。モラルを喪失しているかのように見える親であり、具体的には、深夜であっても早朝であっても担任の携帯電話や自宅に電話をかけてきたり、突然学校に押し掛けて授業が始まる時間になったとしても聞く耳をもたずに話し込んだりするタイプの親である。「学校もサービス業なのだから当然そうあるべきだと考えている」（尾木 2009: 110）サービス過剰な社会風潮により、気に入らないことがあれば、ダイレクトにクレームをぶつけて対応を迫ってくる。要求を通すためならば、教師を殴ったり、刃物を持ち出したりという事例も出ている。

4番目は、〈学校依存モンスター（精神的自立を遂げていない親）〉である。事例としては、〈私も朝起きることができないので、モーニングコールをしてほしい〉、〈毎日の体育着の選択が大変。学校で洗濯してもらえませんか〉など、本来なら家庭でやるべき雑務や子どもの世話までを学校に要求してくる。このように、学校や教師に対する甘えが見られるのがこの親のタイプである。

5番目は、〈権利主張モンスター（権利をはき違えている親）〉である。要求を主張し、それを通すために法律や権利を振りかざすタイプである。尾木は、本来ならば家庭や地域、会社や友人など信頼できる人とのつながりの中でグチを吐露し、解決されるべき程度の問題なのにもかかわらず、今日ではそれをできるコミュニティをもっていない親が存在するため、学校という公共の施設に対して直接無理難題な要求を訴えてくる、と述べている。（尾木 2009）

このように、〈モンスターペアレント〉と呼ばれる保護者の問題ある行動パターンは多岐にわたるが、その保護者たちは一人ひとりその背景になにかを抱えている。その要求の内容は、単なる親のわがままなものも存在するが、コミュニケーションが希薄になっている現代社会の中で、どこにも受け口がないストレス、さらには怒りを、公共の場である学校にぶつけている、ということがわかる。

## 第2章 学校対応の現状について

### 2.1 現在行われている学校対応

文部科学省では、現在、〈学校マネジメント支援推進協議会〉をひらき、保護者対応に関する講演会をおこなったり、保護者対応のマニュアルを公表したり、という活動をしている。2011年1月19日に行われた講演会では、佐藤晴雄が〈クレームをどう捉えるか〉〈クレーム対応の基本視点〉〈対応段階〉などの具体的な対処マニュアルを発表している。(佐藤 2011) そのほかにも、各地方自治体ではそれぞれ教育委員会などが対策を練り、保護者や地域からの要望・苦情の対応マニュアルを作成している。

京都市は、2007年8月に〈学校問題解決支援チーム〉を発足させた。そこでは、学校や保護者への直接指導・支援に当たるなど、問題解決を目指すとともに、関係機関との連携をはかっている。〈学校問題解決支援チーム〉では保護者を排除するのではなく、学校と保護者の関係を改善していき、子どもたちの学びと育ちを保証するために地域との連帯を深め、外部の専門家も含めて活動している。さらに、2007年11月には〈自律促進教育チーム〉を発足した。このチームでは、より学校との関係を密なものにし、問題を未然に防止するため活動している。以上のように、京都市では問題が寄せられるのを待つのではなく、担当の主事などが学校を回って、より早く情報を把握するように努めている。

### 2.2 教育再生委員会

〈モンスターペアレント〉と呼ばれる保護者の様子が多くの学校で見られるようになったことにより、各自治体は具体的な対応策を取らざるをえない状況に至った。そして、「モンスターペアレント」という言葉が世間に広まった、2007年より、教育再生委員会、新聞記事、教育委員会などの場においても、学校に対する理不尽な保護者の動向についての話し合いがおこなわれ、教育委員会では保護者対応マニュアルが作成された。

嶋崎政男(2008)によると、2007年6月、教育再生会議が第二次報告書を発表した。その審議過程で、〈モンスターペアレント〉と呼ばれている保護者に、教師に代わって弁護士らが対処する〈学校問題解決支援チーム〉(仮称)の教育委員会への設置が提唱され、これを受けて多くの人が〈モンスターペアレント〉という命名に衝撃を覚えることになった。そして、「保護者の厳しさが、そこまできているのか」と驚きの声をあげた、と述べている。(嶋崎 2008)

教育再生会議は、2006年10月18日、当時の安倍晋三首相が閣議決定によって設置したものである。当時の安倍首相は、「すべての子どもに高い学力と規範意識を身につける機会を保障するため、公教育の再生、家庭、地域の教育力の再生が重要だ」と発言した。(『徳

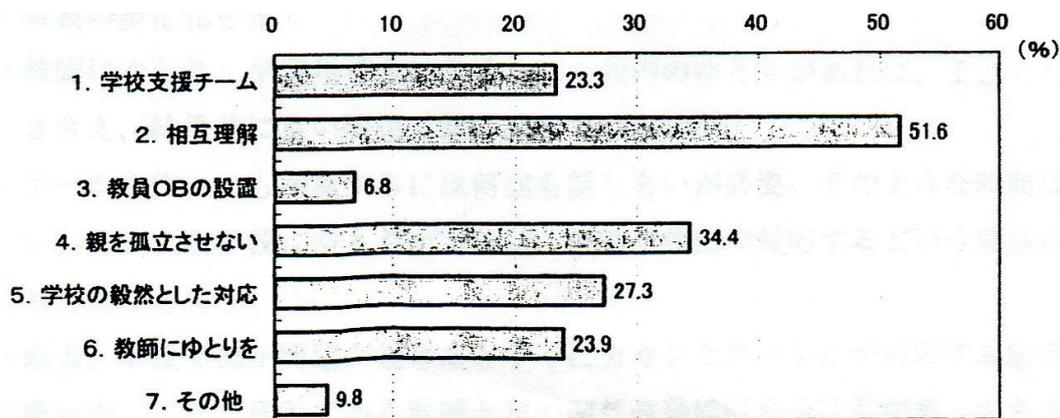
島新聞』2006年10月19日夕刊)さらに、教育内容の改革の提言の中で、「保護者に重大な問題がある場合には、子供を守るため、状況に応じ、児童相談所や警察等の関係機関に連絡をする」と言及している。しかし、保護者に重大な問題とは、なにを意味しているのかは全く述べられていない。

2007年6月1日に第二次報告書が発表され、そのなかでは学校が抱える課題に対して機動的に対処する、という提言がなされている。教育委員会は、学校問題解決対策チームを設け、学校において、様々な問題を抱える子供への対処や保護者との意思疎通の問題が生じている場合、関係機関の連携の下に問題解決に当たる。チームには、指導主事、法務教官、大学教員、弁護士、臨床心理士・精神科医・福祉司、警察官(OB)などの専門家の参加を求める、と述べている。ここにおいて、初めて保護者との意思疎通の問題が取り上げられることとなった。しかし、安倍首相の退陣後、12月25日に第三次報告があり、2008年1月31日に最終報告が発表されたものの、具体化はされずに会議は終了した。

### 2.3 現行の対策の問題点

現行の、〈モンスターペアレント〉と呼ばれる保護者の対応策について、多賀幹子は、現在の制度は一時的なものにすぎないのではないかと指摘している。〈制度〉や〈支援隊〉によっていったんは圧倒されても、ほとぼりが冷めれば、また登場するのではないかと。根本的な解決を目指すのであれば、保護者とのコミュニケーションを深めることや、PTAを活用して保護者同士の連携を強めること、学校と地域との接点をより多く持たせること、さらに、〈教師の人間力向上〉、〈教師のチームワークの強化〉などを進める必要がある、と述べている。(多賀 2008)

また、2009年に尾木が実施した〈モンスターペアレント〉の実相に関するアンケート調査によると、〈教師と保護者の問題を解決するために必要なこと〉に関する質問の回答は、〈親と教師の相互理解が高まるよう努力・工夫をする〉(51.6%)〈親を孤立させない、地域にたまり場などのサポートセンターをつくる〉(34.4%)などの意見が上位の回答である。これに対し、教育再生会議の提言や、各地の自治体が設置を進めている、〈学校問題解決支援チーム(医師・警察OB・臨床心理士・精神科医・弁護士など)をつくる〉という解決策の評価については、下位の23.3%にとどまっている。これは、政府などの基本方針が積極的には支持されていないことを示しているといえる。



## 図2 どうすれば「モンスターペアレント」問題を解決できるか

出典：尾木直樹(2009)

齊藤浩(2010)は、2008年に神奈川県内の公立小学校に勤務する教諭を対象に、「モンスターペアレントに対する現行の対応策の効果」に関する調査を実施した。その調査のなかでは、〈現在実施されている自治体などの対応策である、苦情対応のマニュアル作成、対応専門チームの組織、弁護士や臨床心理士などの活用などは、将来にわたって保護者の利己的な言動が減る方策だと思いますか〉という質問がされた。それに対し、524人中〈はい〉と答えたのが47%、〈いいえ〉と答えたのが53%だった。〈いいえ〉と答えた回答者のうち、理由として多くの意見があがったのが、〈保護者の意識改革や心を変える方法ではない〉〈対処療法的で長期的な解決策になっていない〉というものだった。

現行の対策では、状況に対応するために苦情マニュアルの作成や、対応専門家チームの組織を各自治体に配置することである。齊藤は、「確かに一定の成果はあげられるだろう。しかし、現行の対応策はどうしても事が起こってからという対処療法的なものであり、保護者の利己的な言動を将来にわたって減らしていくような根本的な対策としては課題が残る。」(齊藤 2009:117)と言及している。

これらの先行研究から、〈モンスターペアレント〉と呼ばれる保護者の問題を解決するために、政府の基本方針や各自治体などの取り組みに頼ることにたいして、教師も保護者も大きな期待はしていないことがわかる。むしろ、それよりも学校や教師と保護者の関係性を高めていくことのほうが、一時的な解決にとどまらず、抜本的な問題解決につながっていくと考えている。また、そのためには〈教師同士の連携〉や〈学校がチームワークよく運営〉されていくことがなによりの問題解決に近づく方法ではないかと考える。

そこで、現在の文部科学省や教育委員会などの外部環境による対応策ではなく、〈教師間の連携〉や〈学校のチームワーク〉というものが〈モンスターペアレント〉問題の解決にはより効果的なのではないか、という点をリサーチクエスチョンとし、第3章以降の言及につなげていく。

## 第3章 調査の方法

### 3.1 調査概要

先行研究での、〈モンスターペアレント〉問題の予防、また長期的に解決していくためには「教師間の連携」や「学校内のチームワーク」が大切である、という仮説があてはまるか否かを調べるため、インタビュー調査をおこなった。

インタビューをおこなった期間は、2011年6月23日～2011年11月13日である。また、調査ではICレコーダー、ノート、ペン、を用いた。調査対象者の属性は、以下の表1に記述したとおりである。

Aさんは、東京都の私立中学高等学校の元教師であり、現在は、教師を引退しているが、学校からの要望もあり、部活の指導を請けおっている。教師歴も40年を超えてい

る、ベテラン教師である。Bさんは、Aさんと同じく、東京都の私立中学高等学校の元教師である。教師歴も同じく40年を超えているベテランの教師である。Cさんは、東京都の私立高等学校の現役教師をしている。また、Aさん、Bさん、Cさんは同じ学校の元教師や現役教師である。3人とも、高校の知り合いを通じて、インタビュー調査をおこなうことができた。

Dさんは、大阪府の公立中学校の現役教師である。教師歴は33年のベテラン教師であり、大学の知り合いを通じてインタビュー調査をおこなうことができた。また、Eさんも、Dさんと同じ学校の元教員である。教師歴は39年のベテラン教師であり、現在も、学校の要望があり、週に何回か教壇に立つことがある。Eさんは、Dさんの紹介によってインタビュー調査をおこなうことができた。

表1：インタビュー対象者一覧

学校	教諭	性別	年代	教師歴	インタビュー実施	インタビュー時間
A校(中高一貫校)	Aさん	女性	50代	30年以上	6月23日	1時間
	Bさん	男性	50代	30年以上	6月23日	30分
	Cさん	男性	40代	20年以上	6月23日	30分
B校(公立中学校)	Dさん	女性	50代	33年	11月13日	1時間
	Eさん	女性	50代	39年	11月13日	1時間

### 3.2 質問の内容

質問の内容は、1)実際今までに経験した、保護者とのトラブルについて、2)それをどのように解決したのか、3)実際に学校が行っている対策について、4)トラブルが起きたとき、先生間の連携や学校のチームワークはとれていたか、などを中心に質問をおこなった。

第4章ではインタビュー調査の内容を、A校の事例とB校の事例に分け、さらに5人の教師それぞれの事例について述べていく。

## 第4章 インタビュー調査の結果

### 4.1 〈モンスターペアレント〉の事例

#### (1) A校Aさんの場合

Aさんは、実際にあった事例について、音楽大学を受験させるから、ピアノを弾くのに怪我でもしたら大変なので、体育の授業に参加させないでほしい、という要求をされたことがある、と回答した。そのような要求をされたとき、どのように対応するのか質問すると、

保護者を説得できなければ、教師としてプロフェッショナルじゃない。だから、「学校の教育として、それはできません」とはっきり言った。だって学校に行かなくても怪我をする場合はあるし、受験の日に風邪をひくかもしれないじゃない。それはそれ

で、その子の持っている運の問題なのよ。プロフェッショナルの教師は、〈親のスキをつくらない〉。スキがあるから、ちょっとでも問題があると、そこに付け込んでくる親たちが出てくる。そのためにも、〈スキのない教師を育てる〉ことが大事だし、〈若い先生の教育〉が重要なの。

このように、〈教師の教育〉についての回答が得られた。また、〈スキのない教師〉を育てるには、どのようなことが必要だという質問に対しては、

民間企業で、研修期間があるように、教師になる前にも研修期間が必要だと思う。現場に立つまでに実習したほうがいい。

このように述べており、Aさんの回答からは、一人ひとりの教師を教育し、〈スキのない教師〉を育てることによって、〈モンスターペアレント〉のような保護者にきちんと対応できるようになる、ということがうかがえた。

また、今の保護者は、昔と変わってきたと思いますか、という質問をしたところ、次のような回答があった。

昔は、子どもを人質にとられているような感覚があったから、親は〈学校に意見を言いたくても言わない〉のが普通だった。だけれども、今は〈子どものために発言する〉ことが多くなった。

さらに、保護者が〈子どものために発言する〉ように変化した背景について、地域で子どもたちが遊ばなくなったことや、地域の人々との人間関係が希薄になってきたことが原因だと述べている。さらに、女性の社会進出によって、子どもが親と触れ合う時間が短くなったことにより、子どもが親に〈もっと興味を持ってもらいたい〉という気持ちが強くなり、事実を大げさに話すことが多くなった、と述べていた。そして、これらの問題点について、次のように述べている。

そのことによって、親は他人の子どもと比較して自分の子どもを〈客観的にみられなくなった〉。それと、女性の社会進出によってさらに他人の子どもと比べる機会がなくなって、さらに、子どもは〈親に興味を持ってもらいたい〉って思うから、学校であった事を親に大げさに話す。また親は100%子どもの言うことを信じている。そういう風に変ってきている。

Aさんは、昔の親との変化について、〈子どもを客観的にみることができない〉親が増えたことについて言及している。

また、保護者と教師の問題を解決していくためにはどのようにしていけばいいと考えるか、という質問に対しては、〈若い教師の教育〉の重要性について述べていた。

先生をどれだけ教育していけるか。それから、これから小学校に上がる親では、こ

ういうことに注意して、こういう風に育てなきゃいけない、みたいな知識を、地域ぐるみだったり、地方自治体のような組織みたいなものが教育していかなければならない。それと、子どもは自分の心に思っていることを、きちんと、他人に表現していくんだよーっていうことを教えてあげなければいけない。そしてそれに対して、教師は応えてあげなきゃいけない。だから、〈三社それぞれが知識をもっていくこと〉が大切なよ。

ここでの回答のように、Aさんは〈若い教師の教育〉に加えて、〈保護者の教育〉についても言及している。さらに、

保護者との関係の問題には、子どもの自己表現能力が低いことも関係している。

このように、〈子どもの自己表現能力の向上〉を成長させることも、〈モンスターペアレント〉問題を解決に導く方法だと言及している。そして、A校では、〈保護者の教育〉と〈子どもの自己表現能力の向上〉のため、スーパーバイザーという劇団をやっている方たちに来てもらい、その場で即興劇をやってもらっている。そのなかで、子どもたちの自己表現能力を高められるような、ゲーム形式の即興劇をしてもらったり、授業参観ではなく、プレゼンテーション発表会をしたり、という取り組みをしている。これは、子どもたちがすべて一から調べたり、インタビューしたりしたものを、自分たちでプレゼンをおこなう、というものである。プレゼンテーションもすべて自分たちで段取りを取り決め、一人ひとりの役割も自分たちで決めるものため、見に来た親たちも、ちゃんと〈他人の子どもと比較〉することができる。このような活動によって、保護者がわが子を客観的にみられるようにしている。

## (2) Bさんの場合

Bさんの事例では、校則違反に対して、停学処分にしたら、親ではなくてチンピラが来たことがあり、その問題でBさん自身はそれ以上大きな問題に発展することはなかったが、学校の先生方3人くらいが辞めさせられた、と回答した。そのときの対応について質問したところ、次のような回答が得られた。

絶対に〈ブレない〉こと、そして〈毅然とした態度〉で対応することを心掛けていたよ。もちろん、こちら側に落ち度があったなら、そういう態度では対応できなかっただろうけどね。ちょっとでも引いてしまったら負けだからね。先生は悪いことはしていないのだから、〈きちんと、どういう理由で停学処分にしたのか、をはっきりと説明〉して、丁重におかえりいただいた。「これ以上ことを大きくしたら、警察に通報する」ともはっきり言ったよ。

このような話の内容から、Bさん個人の教師としての強さを感じた。その後、〈モンスターペアレント〉によって、教師が辞めてしまう現状についての質問したところ、以下のよ

うな回答があった。

教師になるには、〈子どもの人格を教育するもの〉としての〈素質〉とか〈能力〉とか〈適性〉もある。あとは、生徒の危険が迫っているかどうかの予測ができるか、とかね。そういうものを兼ね備えていなかったり、その能力が育っていなかったら、教師は務まらない。1+1を教えるのは簡単だけれど、教師はそれだけではなくて、人格の教育なんだから、その〈覚悟〉がないといけないんだよ。

Bさんは、〈教師が辞めてしまう現状〉に対しては、教師としての〈素質〉や〈能力〉や〈適性〉が関係している、と考えている。また、Aさんと同様に、〈教師の教育〉が大切、という回答を聞くことができた。

### (3) Cさんの場合

実際に、〈モンスターペアレント〉のような保護者とのトラブルになった経験は数えきれないほどある、と回答したCさんであったが、今回は、インタビューの実施日から半年前までにあったトラブルについて回答してくれた。校則違反で携授業中に使っていた生徒に対して携帯を没収したところ、後日、〈没収されていた期間の携帯料金を払え〉と金銭的な要求をされた、と述べていた。

その後、昔と今の教育現場で、変わったと感じるところはどのようなことですか、という質問に対して、次のように回答している。

〈モンスターペアレント〉のように、親も変わったけど、逆に教師も変わったと思う。

このように、Cさんは保護者の変化だけではなく、教師側の変化も感じているという。

今は、「就職できなかつたら教師になる」っていう人がいるけれど、私の時代ではそんなことは絶対になかった。教師は〈聖職〉っていわれていたような時代でもあったから。「どうして先生になりたかったのか」っていう、背景がちゃんとある人と、それがなくて教師になった人とは、教師になった後も全く違うし、そういう人に限って挫折するね。私は、〈モンスターペアレント〉じゃなくて〈モンスターティーチャー〉ではないか、なんて思うよ。

時代の変化によって、親が〈モンスター化〉しているという問題があげられるなか、Cさんが感じているのは、教師も〈モンスター化〉しているのではないか、という回答であった。

〈どうして先生になりたかったのか〉っていう、背景がちゃんとある人と、それがなくて教師になった人とは、教師になった後も全く違うし、そういう人に限って挫折するね。

このように、若い教師の教師としての〈覚悟〉について疑問を抱いている。ここまでA校3人の教員へのインタビューをまとめたが、3人とも共通して、〈若い教師の教育〉についての回答をしている、という傾向がみられた。

#### (4) B校Dさんの場合

B校のDさんからは、A校のB先生の事例と似た「チンピラ」のような〈モンスターペアレント〉の保護者に関する事例を聞くことができた。Dさんは、次のように話す。

その事例の一家は、父親は〈ヤクザ〉の下っ端のような人であり、母親は夜に働きに出ている。子どもは5人兄妹で、生活苦が困窮していた。生活は困窮しているのにもかかわらず、さらに父親は病気がちであり、暴君である。そのような生活を耐え抜いてきている母親であるが、さらに子どもが学校で事件を起こすため、学校に頭を下げたり、ご近所に頭を下げて回らなければならないことが続いていた。そんな状況から、母親〈モンスターペアレント〉となったのではないかとDさんは述べる。

子どもは、学校でとても暴力的であるため、ほかの子どもたちが怪我しないよう、教師が止めに入ることもしばしばあった。しかしそのとき、教師はもちろん大人だから手加減するけれど、子どもは加減をしない。そのため、振り払おうとしたところ、教師が怪我をする、という事件が多々あった。そのため、学校としては、「教師暴力は絶対に許してはならない」という判断を下し、その男性教師に「被害届を出してほしい」とお願いした。

これに対して、〈モンスターペアレント〉の父親は、重たい病で、障がい者手帳を持っているほどで、寝たきり状態である。それなのにもかかわらず、被害届を出すという話になると、父親が杖を突きながら学校に来て、土下座をする、という行動をとった。それに対し、学校は〈それはできない〉と話をしたところ、態度は豹変した、という。

「学校としてそれはできない」と言うと、とたんに態度は豹変しましたね。自分の子どもが間違っていたなら正して、成長させていくべき、と思うのが普通だと思うんだけど、この親にはない。だから、とにかく、早く詫びをいれて、〈わが子にもし有利なことが判明したら、そのあとねじ込めばいい〉という感覚やね。

Dさんは、相手が、「チンピラ」のような保護者であり、ものすごい勢いで暴言を吐くため、こちらもそれに便乗して、感情をぶつけてしまいそうになるという。しかし、そのようなことは絶対にしてはいけない、と述べていた。そして、このような暴力的なタイプの保護者に対する対処方法について回答してくれた。

こちらが感情的になれば、とたんに言葉尻を捕まえてものすごい勢いで反論される。だから、何を言われても〈淡々と丁寧な言葉で〉対応する。それ以外に対処する方法がない、このモンスターに対しては。絶対に〈言葉尻を捕まえられない〉ことやね。

そして、被害届を出すことが決定した後、その届けを出した教師は、暴力を振るった生

徒の仲間から、長い間嫌がらせをうけていたため、学校として、その教師のサポートを続けていた、と D さんは話す。その内容は、次のようなものである。

学校としては、チームだった。学校は、その先生がその後何かされないように、常にその先生に誰かが付いておくことにしていた。先生を一人にしないようにしていた。そうすれば何かあった時にも証言できるし、何かされても止めに入ることができる。子どもたちは、その先生を挑発して、今度はその先生を訴えようとしていたから、できるだけ、その先生を一人にしないようにしていた。

自分の生徒に対して被害届を出し、訴えをおこすということは、非常に辛い決断であったと思う、しかし、その生徒は何度か教師に対して暴力を振るっていたため、ほかの先生がけがをしないためにも、という思いから、苦渋の決断をしてくれた、と D さんは話す。このようなことから、B 校では〈教師の連携〉がとれていた、ということがわかる。

また、D さんは、〈過保護・過干渉のモンスターペアレント〉についての事例も話してくれた。その母親は、自分の娘がいじめられているほどでなくても、少しでも子どもが嫌な思いをすると、必ず学校に来て「学校は何をしているんだ」という感じで攻め立てる、という親であった、と述べている。

母親が、その子のために絶えず母親が学校に来るというかんじですね。我が子可愛さのあまり、〈子ども目線でしかみられない〉母親でしたね。先生からすると、この親は、〈親として生きていない〉子どもが子どもの世界で生きていくことを教えず、〈子どもと全く同じ目線で、子になりかわって親が生活してしまっている〉。

D さんのいう、〈子ども目線でしかみられない親〉また〈親として生きていない親〉という言葉は、A 校の A さんのインタビューでの回答にあった、〈自分の子どもを客観的にみられない親〉と共通していることがわかる。

#### (5) E さんの場合

E さんは、39 年間教師をつづけてきたベテラン教師であるが、そのなかでも一番苦勞し、体にまで症状が出てしまった、〈モンスターペアレント〉の事例について次のように回答してくれた。

E さんは、今の学校に転勤してすぐ、中 1 の担任になったとき、その〈モンスターペアレント〉の母親とトラブルが起きたと話す。その子どもは小学校の間、スイミングスクールで活躍していたそうで、学校に入学後は学校の名前で出してもらいたい、という要望があった。しかし、当時学校に水泳部がなく、会議結果、学校の水泳部としては試合に出られない、という結論になった。その子の入学後、試合に出られないことを告げると、ものすごい勢いで親からの抗議をうけた、と E さんはいう。そして、子どもは E さんの言うことは、まったく聞いてくれず、反抗的な態度が続いていたという。また、(先生は数学の担当だったことから、) 先生の数学の教え方が悪くて理解できない、と言われることや、登校拒否をするようになったというが、その全てを E さんのせいにされていた。さら

に、E先生はこのように話してくれた。

ほかの先生の言うことは聞いても、先生の言うことは一切聞かない態度だし、反抗されることがずーっと続いた。そして、最終的には、その母親から「先生は女やから、ダメなんや」、「女やから、うちの子に厳しく注意できないんや、もっとバシッと叱ってくれたらうちの子もいうこと聞くのに」っていうような感じで言われてしまって、..このときはもう、何も言えなくなってしまったわね。

このように、日常的に〈モンスターペアレント〉の理不尽なクレームや要求は続いていた。そのために、先生はストレスが体に出るようになってしまい、夕方ころになると、毎日腹部に蕁麻疹が出るようになっていたそう。

そのときは、どうして乗り越えることができたのか、質問したところ、次のような回答を聞くことができた。

その当時、生徒が先生に声をかけてくれることがあった。「先生、あいつとあの親が間違ってるんやし、気にすることないで」と、その子が反抗的な態度をとっていたりすると、生徒が励ましてくれた。それに、〈周りの先生方も理解してくれていて〉、私とその母親に対応できないときがあると、代わりに先生が対応してくれるときもあった。それと、結局その子が、学校の水泳部として全国の試合に出られることになった時は、学校長が協力してくれ、自らその子を水泳の大会に連れて行ってくださったことがあった。

Eさんは、〈周りの先生方が理解してくれた〉ことで乗り越えることができた、と話す。また、Eさんには、現在日本でとられている対応策をふまえ、〈モンスターペアレント〉の問題を打開するためには、どのようなことが大切と考えますか、という質問をした。それに対して次のように回答していた。そのなかでも、大切なのは〈人とのコミュニケーション〉だという回答を聞くことができた。

教育委員会とかでは、地域の人との交流を増やすためのコミュニティースクールをつくることもいわれているみたいね。だけど、まずは、〈足を運ぶこと〉。やっぱり、電話で対応したりするのではその人の本意が見えにくいものになってしまうからね。やっぱり、大変だとしても、何べんも何べんもお家に訪問して、きちんと人と人で話をしていくことで、信頼関係も生まれるし、解決に向かうと思う。

地域の交流が希薄になっているからこそ、デスクワークがどんなに忙しくても、〈足を運ぶ〉そして、〈直接話を聞く〉ことを心がけていた、と述べていた。

## 第5章 分析・考察

表2：インタビュー調査分析

	若い先生 の教育	自分の子 どもを客 観的にみ ることに できない 親	教師の連 帯・学校 のチーム ワーク	教師とし ての素質 が必要	チンピラ のような 親に遭遇	以前より も無理難 題な要求 が増えた と感じる
A先生	●	●		●		●
B先生				●	●	●
C先生	●			●		●
D先生	●	●	●		●	●
E先生			●			●

### 5.1 〈モンスターペアレンツ〉の現状

Aさんは、インタビュー調査の中で、自分の子どもを〈客観的にみられなくなっている〉と話していた。そして、そのことが〈モンスターペアレント〉を生んでしまう原因にもなるという。この回答は、B校のDさんも共通していたものである。Dさんの場合、〈過保護、過干渉のモンスターペアレント〉との問題が発生した際に、その保護者を、〈子ども目線でしかみられない親〉という言葉で表現していた。

子どもたちの間の人間関係や、子どもたちだけで解決すべき問題を、〈子どもと同じ感情になって〉、親が学校に苦情をぶつけにくる、このように、第2章に記述した、尾木の〈モンスターペアレント〉の種類に分類されるような、わが子中心な保護者が実際に存在することがわかる。

また、AさんとDさんが話す、〈過保護・過干渉の親〉の出現の原因として、2人の教師が感じているように、〈子どもを客観視できない、子どもの目線でしかみられない〉、親としての成長を果たせていない保護者、つまり、尾木の〈モンスターペアレント〉のタイプによると、〈わが子中心モンスター〉である。子どもに対して保護者が過保護であり、過干渉という特徴があり、わがままな保護者だといえる。わが子を私物化し、猫かわいがりしている保護者が、実際に存在していることが分かった。

### 5.2 各校の対応の比較と評価

#### 5.2.1 共通点

全員が共通して回答していた点は、〈以前よりも無理難題な要求が増えた〉と感じている点である。5人の教師は、ともに20年、または30年以上の教師歴をもっており、その長い教師歴の中で、確実に〈以前よりも保護者とのトラブルが増えた〉また、〈無理な要求が

増えた」と回答していた。

### 5.2.2 相違点

前章でも述べたように、A校の3名の教師は、〈若い先生の教育〉や〈教師としての素質・能力・適性〉、〈教師の覚悟〉という要素が〈モンスターペアレント〉の予防や対応に重要なものと考えていることが共通していた。親の介入ができないくらい、〈スキのない教師を育てる〉や〈素質・能力・適性・覚悟のある教師〉というように、若い教師の教育を重要なこととしていた。また、〈モンスターティーチャー〉の存在についての指摘をする考えもみられた。

それに対して、B校の場合は、〈若い先生の教育〉という表現はあまり強調されることはなかった。しかし、そのかわりに〈学校のチームワーク〉という表現が多く使われていた。保護者のことで何か問題があれば〈教師の間で情報を共有する〉ということや、〈学校はチームだった〉〈先生たちが協力してくれた〉という回答があった。

## 5.3 総括

### 5.3.1 若い教師の教育の重要性

多賀（2008）は、〈モンスターペアレント〉の抜本的な解決策の一つとして、〈教師の人間力向上〉を挙げている。A校の教師が〈モンスターペアレント〉の対策について〈若い教師の教育〉を重要視していたことと一致している。また、〈モンスターペアレント〉の問題は、今後なくなることはないといわれているため、教師が強い〈覚悟〉をもって仕事をまっとうしなければならないことは明らかである。

### 5.3.2 教師の連携・学校内のチームワークの大切さ

B校のインタビュー調査からは、〈学校のチームワーク〉が働いたことにより、教師が仕事をやり遂げることができた、という事例を聞くことができた。Eさんの話からは、周りの先生からのサポートや、生徒の気遣いがあったからこそ、なんとか乗り越えることができた、という回答があった。また、被害届を出さなければならなかった教師の事例でも、学校全体でその教師のサポートにあたっていたことがうかがえる。このような〈教師の連携〉があったからこそ、教師暴力をも乗り越えることができた、という事例がある。

Bさんの話では、保護者とのトラブルによって何人もの教師が〈辞めさせられる〉という回答があった。「教師がやめさせられてしまう」という事例からは、学校内で、その先生方に対するサポートやフォローがなされていたことはうかがえなかった。このような事態を防ぐためにも、〈教師の連携〉重要なものだといえる。

これらは、現在の制度的な一時的な解決策ではない。B校では、多賀の否定する、〈制度〉や〈支援隊〉による一時的な解決ではなく、根本的な解決にむかうための〈教師のチームワークの強化〉がおこなわれていた、といえる。（多賀 2008）

おわりに

現在では、教師の授業数や、仕事が増えいき、その多忙さが問題となっているなか、各自治体では、地域の人とのコミュニケーションをとれるよう、対応策として〈コミュニティースクール〉の提案をしている。しかし、これらは多忙化している教師に負担となり、現実には長期的に続けることは難しい。インタビュー内で E さんも述べていたが、教育委員会や各自治体がつくったシステムよりも、まずは〈足を運ぶこと〉、そして直接会って人との〈コミュニケーション〉をはかること、が重要である。

さらに、今回のインタビュー調査から、〈モンスターペアレント〉の問題が発生した時の対応や、原因のとりえ方に A 校と B 校の違いがみられた。解決の手立てとして、A 校は〈若い教師の教育〉ととらえる傾向があり、B 校では〈学校のチームワーク〉〈教師の連携〉によって解決していくかたちがみられた。このように、共通している点がある反面、〈モンスターペアレント〉の解決方法や対処方法に関する考え方には、違いがある。

現在の〈モンスターペアレント〉の問題は、多岐にわたっている。尾木（2008）が〈モンスターペアレント〉の分類について言及しているように、そのクレームの種類もさまざま。そのため、これから〈モンスターペアレント〉の問題を解決の方向へと向かわせ、抜本的な解決をするためには、A 校の教師がいう〈若い教師の教育〉が重要である。しかし、多種多様な問題が生まれる保護者との問題を抜本的に解決していくには、一人の教師の力ではむずかしい。そのため、学校組織として、〈教師の連携〉をはかり、学校が一つの〈チーム〉となって多種多様な問題に対応していくことが重要である。

希薄になっている、地域の人々とのコミュニケーションをとり、〈足を運んで〉保護者との信頼関係を築き、さらに〈教師の連携〉と〈学校内のチームワーク〉を強くすることで、保護者とも必ずよりよい関係がつかれる。